

# 認識の町

大村伸一

目覚ましの鳴る前に目が覚めた。まだ五時なのに外は明るく鳥が鳴いていた。窓から外をみるとぼた餅のように膨らんだすずめが何かを啄ばみ、羽ばたいて飛んでいった。

僕はまだ寝ぼけている体をゆっくりと動かしながら、玄関の郵便受けに突っ込まれている黒とピンクのビニール袋を回収し、狭い食堂のテーブルの上においた。それから、両親の寝室に向かい、まず母を起こして食堂まで連れて行く。言う通りにしてくれるので、苦労もなく母はピンクの袋を置いた席に座らせられた。それからまた寝室に戻り、今度は父を起こした。既に目を開けてはいたが何が気にいらぬのか父は僕の腕を振り払い動こうとしない。何か夢をみたのだろう。僕は父の背中をさすり、しばらくして落ち着いてからまた、食堂に行こうとささやいてみた。父は、今度は従ってくれた。気味の悪いことはするなど、ぶつぶつぶやいていたが、それがなんのこたなのかわからない。分からないことを解釈しようとしてはいけない。そう教わってきたはずだ。

食堂のテーブルに二人で向き合って座らせると、何も言わずに揃って目の前のビニール袋を破り、中の新聞を取り出した。テーブルの下に隠す様にしてそれを読む姿はそっくりで、毎朝のことだがあまりにもそっくりな行動をするので僕にはすこしおかしかった。二人が新聞を読んでいる間に、僕はそれぞれの前に8インチの小型テレビを起き、ステレオヘッドフォンを二人の耳に装着した。新聞をあらかた平らげると、父はテレビのスイッチを自分で入れる。母のテレビのスイッチは僕が入れた。

二人が、テレビに夢中になっている間、僕は隣の自分の部屋にもどり自分のテレビに電源を入れる。ヘッドフォンをしていても外の物音が聞こえるようにはしている。

テレビの音は平板で少しかすれているように聞こえるが、今のテレビはどれもそんなものだ。今日のニュースを一通り紹介すると、今朝の最後のニュースが始まった。「救世主の登場」という文字が画面に大きく映し出されるとすぐに消え、ライブ映像に切り替わる。そこに映し出されたのは、何か狂信的な目つきをした長髪の男で「このままでは人類は破滅する。私の言葉を聞いてほしい」と、訴えていた。ニュースキャスターが「このような救世主騒ぎは、五十年に一度くらい起こるものです」と根拠のないことを言う。言外にその男には気をつけるようにと言っているようだった。

食堂では、父も母も自分たちの好きなチャンネルを見始めていた。床に散らばったビニール袋や、昨日の夕食のパッケージは帰ってきてから掃除すればいいだろう。そう思って、僕は母と父の肩に少し触れてから、外出した。

町には様々な色を組み合わせた広告のノボリが無数に立てられていて、空も見えない。どのノボリも、私を見て。俺を見ろ。と言い募っているようだ。だが、そのくせ読まれてはかなわないと、いつでも通りには強い風が吹き、文字がはっきりとは分からないようになっている。読めそうで読めないノボリの文字はジッと見ているとすぐに目が回り気分が悪くなる。生まれたときから今まで、一度もそれに慣れることはなかった。だから、小さな頃から僕は町では俯いて上を見ないように歩いた。それでも、いつものあの店への道順は間違えない。幾分重いドアを腰に力を込めて開けて入った。入れたてのコーヒーの香りがした。店には幸いまだ一人も客はいなかった。店の主人も奥に引っ込んでいて、カウンターにはフミ、一人だった。

「おはよう」

少しためらったのだが、そう声をかけた。フミはそれを聞いて真っ赤になって頷き、コーヒーの準備を続けた。返事はなかった。それでも、僕は今朝のこの幸運に少し嬉しくなり、いつものテーブル席についた。さすがに、カウンターでフミと向かい合わせになろうとするほどあつかましくはなれなかった。

やがてフミがコーヒーを運んできて僕はその場で代金を手渡した。そんなことでもないどフミに触れられるチャンスはない。フミは硬貨の重さを確かめてからカウンターの中に戻っていった。

コーヒーを飲みながら、僕はまた小型テレビを取り出して関連するニュースを探した。あの救世主のことが気になっていた。あの男は何を信じろと言っていたのだろうか。僕の生活は変わるとでも言うのだろうか。両親を介護する毎日。これから父や母がいずれ動けなくなれば、もっとつらいものになってゆくだろう。そうして失われる僕の時間。女の子と付き合うことなど想像もできない。そんな人生に意味などあるものだろうか。救世主は、それを変えてくれるだろうか。

ニュースソース社の無加工映像を見つけた。今朝のニュースで編集され見えなかった部分を見た。救世主は、今日これから国道の町の出口のあたりで、話をするのだと言っていた。大勢を集めて話をするなど、僕は生まれてから一度も見たことがなかった。第一、それが可能だとは思えなかった。そして、不可能だと思うからこそ、僕はそれを見たくなっていた。

画像の最後で、男は必ず奇跡を見せます、と叫んでいた。「叫ぶ」という言葉を知らないではなかったが、実際に叫んでいる男を見たのは初めてだった。醜いものだと思った。やはり狂っているのだろう。行っても何も変わりはない。

コーヒーを飲み干す。もう少し飲みたいと思ったが、もう金がなかった。そんなに贅沢はできない。僕はテレビを上着の内ポケットに入れて立ち上がり、店を出た。すでに店の半分ほど客が入っていて、フミは僕の方を振り向きもしなかった。

まだ両親は食堂のテーブルに腰掛けてテレビを見ているだろう。僕が帰らなければ、死ぬまでそうしているのかもしれない。かといって、僕が戻っても二人の心はもうすでにこの世界にはないのだし、これからも僕に対して苛立つことはあるかもしれないが、感謝することなどないのだ。

僕は地面を見つめながら歩いた。町から外に通じる国道を歩いていた。そのまま町の外に出てゆけば、何かが変わるかもしれないと思った。何も変わらないことは知っているけれど、それでも何かきっかけがきっと必要だ。国道の町の出口に近づいた。人だかりがしていた。その中心にあの救世主が立っていた。僕は通り過ぎるつもりだった。

「皆さん、集まってくださって、感謝しています」

男が大声でそう言った。僕は耳を疑った。大勢の中で、人の話し声をこんなふうに聞いたのは生まれて初めてだった。声がすこしも途切れていない。二人だけで話しているように、言葉がちやんとつながって聞こえる。勿論、その声に驚いたのは僕だけではなかった。近くにいた中年の女や、顔も体もシワだらけの小柄な婆さんも体をびくりと震わせていた。そして、驚くと同時に恥ずかしくなり、僕は俯いてしまう。他の誰かと顔を合わせられなかった。そっと覗き見ると、女も老婆も僕と同じようにうつむき、顔を赤くしている。

集まった人達の反応を救世主が気づいていないはずはなかったが、男は相変わらず大きな声で話した。

「どうして俯いてしまうのですか。声が聞こえることにどんな恥ずかしさがあるのでしょうか。よく考えてみてください。誰かと話をするとき、それがはずかしいですか。だれかの美しい声を聞くことが、人に知られてはいけないことでしょうか。顔をあげて、私の声を聞いてもらえないでしょうか。

そうですね。確かに人はそんなにすぐには変わりません。今日は、そのきっかけを差し上げられればよいと思って、ここに来ました。

私は今日、一つだけ皆さんに奇跡をお見せします。いえ、この声ではありません。このように、大勢の前で話をし、それが皆さんの耳に届くことは奇跡でもなんでもありません」

彼は、そう言うとき背後に置いていた自分のカバンから大きな白いシートを取り出した。それを、背後の壁にピタリと貼り付ける。そこには文字が書かれていた。少し読むとそれが誰かの個人的な手紙だということは分かった。そして、その場にいた全員が小さく驚きの声を上げた。

全員がそこに書かれた文字を読んでいるのに、文字は少しも消えなかったのだ。いつまでも消えない文字の輪郭が、不気味なほど鮮明に見えた。僕はその文字からしばらく目を離せなかった。おそらく、その場にいた全員がそうしていたのだろう。誰もが身じろぎ一つしなかった。それでも、文字は消えなかった。

驚きが全員の心に十分に染み込んだとみると、男はこう語った。

「こんな文字は皆さんどなたもご覧になったことはないでしょう。消えない文字は文字ではないと、そこの牧師さんが言いたそうにしていらっしゃいますね」

彼が微笑みながらそう言うと、指摘された牧師は、戸惑っていたが、何も言い返さなかった。

僕たちに声を上げるなどという習慣はないのだ。彼は、続けた。

「違うのです。昔、文字というものはすべて、読んだからといって消えてしまうようなことはなかったのです。皆さんには奇跡としか見えないこの現象は、実はあたりまえのことなのです」

救世主はそう言い話を中断した。すると、それをきっかけに、いろいろなことが、僕の頭の中をよぎった。

「いったいだれが、何のために、こんな消えない文字を作ったのだろう。第一、そんなことは物理的に不可能じゃないか。読まれてしまった文字が存在しつづけるなんて、エネルギー保存の法則に反する。いや、何か別の保存則だったかもしれないが、物理的に不可能なんだ。これは奇跡というより、ごまかしだ。この男は嘘つきで、ペテン師だ」

僕がそんな結論に達しようとしていると、救世主はまた話し始める。

「私を信じられないのはよく分かります。自分の人生を否定されるようなものですからね。でも、考えてみてください。もし、文字が読まれても読まれても消えないものであれば、我々の貴重な知識を安価な物質に記録し蓄積することができるのです。しかも、記録を維持することに対価はいりません」

救世主の話が突然、金の話になったところで、僕はこいつが我々を騙そうとしている詐欺師であることを確信した。他の面々も同じように感じているのだろう。先ほどの牧師がおどおどしながら言った。

「それは、神の意志に反することです。言葉は、語り手の心を伝えるためにだけ存在し、その役目を終えたら消えなくてはなりません。消えない文字は悪魔です」

牧師は自分の声その場の全員に届いていることに改めて驚いたのか、口を押さえながら周囲の人たちの顔を見回した。牧師のその言葉に、近くにいた女たちがざわめいた。僕は、牧師の声が途切れることなく聞こえることに違和感を抱いていたが、牧師の発言には全く同じ意見だった。そして、次々と、しかしおそろおそろといった調子の声が上がった。

「そんなことは、非科学的だ。ペテンだ」

「それが本当なら、俺は死んだ方がましだ」

「文字が消えなかったら、誰が消すんだよ」

「そんな文字を使って、他の誰かに読まれてしまったら、取り返しがつかないじゃないか」

そんな声の中で、誰かがこうつぶやいた。

「消えない文字で書いたものを、大量に売り出せば、これまでにない商売ができるじゃない

か。大儲けのチャンスかもしれない」

勿論、そんなことを言った青年はその途端、周り中から小突かれ、足蹴にされ追い出されてしまった。

救世主はそんな様子を見て、狼狽することもなく、皆さんの言葉はもったもですといい、それからこう語った。

「そうです。消えない文字などというのは、皆さんを不安にし、拒絶を引き起こす。それは、分かっています。でも、ほんの少しでもその可能性を感じられないでしょうか。世界の貧困と、社会の不安。ここに来るまでにも、道端に何人もの人が傷ついて倒れていました。そういったすべての根源には、文字が読まれると同時に消えてしまうという、そのことがあるのです。どうか、それに気づいてください」

男の言葉を許せていたのはそのときまでだった。その瞬間、その場にいた全員が、もうその男に耐えられないと感じたはずだった。蒸発する言葉は神聖であり、そのような否定をだれも受け入れられるわけがない。合図も、打合せも勿論なかった。僕たちは同時に、この救世主を処刑すると決意していた。僕にはそれが分かった。決意は全員に同時に起こったようだった。僕の頭の中に救世主を読むという考えが生まれた。その場にいた全員がその考えに捕らえられたのが分かった。それまで僕は人間を読むなどということを考えたことなどなかったが、その瞬間、僕は救世主を読むことしか考えられなくなってしまっていた。

僕たちは何も言わず、ただ男を見つめた。男は「救世主」だった。そこにいるのは、他でもないその男という唯一の存在ではなく、ただの「救世主」だった。朝のテレビを思い出せば、僕にはそう認識することはたやすかった。

僕たちは心をつにして、その男を「救世主」という記号として認識した。「救世主」は何も気づかないのか気づいていてそうさせようとしていたのか、ただ僕たちの顔を順番に眺めていた。そのように「救世主」という記号として認識されれば、それが何であれすぐに消滅してしまう。僕たちはそれを知っていた。

だが、しばらくすると、「救世主」の体がぼやけて見えてきた。体の輪郭や顔立ち服の模様までもが周囲に滲んでくる。水彩画で描いた救世主の絵を水の上に落とし、絵の具が水に溶けて絵が失われてゆくようだった。それは、救世主が自分を僕たちに認識されにくくして、消滅を逃れようとしていたのだろう。確かに、僕の中の救世主のイメージは不確実になり、僕は記憶の中の救世主を探りながら認識するしかなくなった。こいつは普通の文字や記号のように簡単には消えないのだなと、僕は感じていた。

自分自身の存在を曖昧にするということは、認識されることから逃れるうまい方法だったのかもしれないが、結局、消滅することには変わりはないのだ。解釈されることによってそ

の一部は消えてゆき、残された部分は曖昧になることで本来の意味を失っていった。それはいずれにせよ結局消えてしまうという点で同じだった。だからやがて救世主は形を取り戻すことができないほど、影のようにぼんやりとしたものになってしまった。

それでも僕たちは本当に救世主がこの世から消滅するまで、その影を見つめ読み続けた。影の、形ともいえない形によって連想される僕の記憶の中のものに注意を奪われないように、僕は救世主に意識を留め続けた。

やがて救世主の影も消え、彼に関するあらゆる観念が消滅したとき、僕たちは彼がこの世界から失われたことを確信した。その後もしばらくの間、僕たちは何もない空間を見つめていた。

結局、解釈されるということから存在を守る方法などないのだろう。救世主とは意味の綻びのようなものなのだ。どれだけ違っているようにみえても、結局何も変わらない。

気がつくと、僕は国道の町の出口に佇んでいた。夕方だった。牧師や、買い物帰りの主婦、それに僕の母に似た老人が、町へ向かって歩いていた。その老婆を見たせいだろうか、僕はぼんやりと両親のことを思い出していた。まだテレビを見続けているだろうか。それとも、もう眠っているだろうか。僕の介助なしで、テーブルの席からどこへも動けないはずだが、それが僕の思い込みで、もう何処かへ行ってしまって家にはいないかもしれない。そう想像してみた。そんなことがないとは言えない。僕の知らないことが両親にはあるはずだ。そうだ、僕はこれまで二人のことをきちんと考えたことなどなかった。いつも、諦めるか逃げ出すことしか考えてこなかった。それが当然だと思っていた。

当然なのかもしれないが、僕はもっと理解すべきなのだろう。すべてを解決するためには僕は両親のことをもっとよく読んで知るべきなのだ。

そう気がついたとき、僕は町の外へ出ることをやめ、両親の待つ家へと歩き始めた。